

【復活讃詞 第7調】

ハリストスか神みよ、なんぢはじゅうじかにて死をほろぼし、とうぞ賊
くのためらに樂園を開き、けいこううぢよのかなしみをなぐさ
め、しとになんぢがふくか活つして、せかいにおおいなるあわれ
みをたましいをつたえさせたまえり。
賜傳

【三歌齋經の讃詞 第1調】

ごおえいはちちとことせいしんにき歸す、いまもいつもよ世
よに、アミン。
ほうしんなるわがしんぶイオアンよ、なんぢはののじゅうしゃにして
にくたいにおける天んしおよび奇跡きしやとあらわれたり。
なんぢはものいみと、けいせいと、きとうとをも以っててんのおんしを
え獲て、しんをもてな爾んぢにはしりつくもののがれいたいのやま
いをいやしたも給う。こうえ榮いはなんぢにちからをあたえししゆ主

にき歸し、光榮いはなんぢにえいかんをこうむらせししゅにき歸し。
こうえいはなんぢをもってしゅうにいやはしをたもうしゅに
き歸す。

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て
かしよう 歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物
を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を
もつこれかざねがものちえめいごあたつみおこなものすその
以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其
すくいためつうかいたわれらいやふとうなんぢしょぼくこのときおい
救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於て
なんぢせいさいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつ
も、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉
たるものしゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたう
るに堪うる者となし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受
なんぢじんじもつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわ
け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我
たましいからだせいわれらしうがいぜんこうもつなんぢつとえ
が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ
たませいしうしんぢよこせいなんぢよろこびなしょせいじんきとうよ
給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人ととの祈禱に依り
てなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【聖三祝文】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらを
聖聖勇毅聖常生者我等

あわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいの
 聖 勇毅聖常生
 ものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 勇毅
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖常生
 こうえいはちちとことせいしんにきす いまもいつもよよにアミン。
 光榮父子聖神歸今何時世世
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖常生
 せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、
 聖勇毅聖常生
 われらをあわれめよ。

司祭) (黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第7調・克肖者の、第7調】

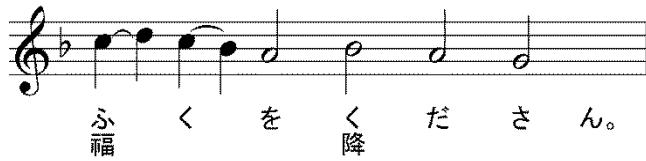
司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんのしんにも。
 爾

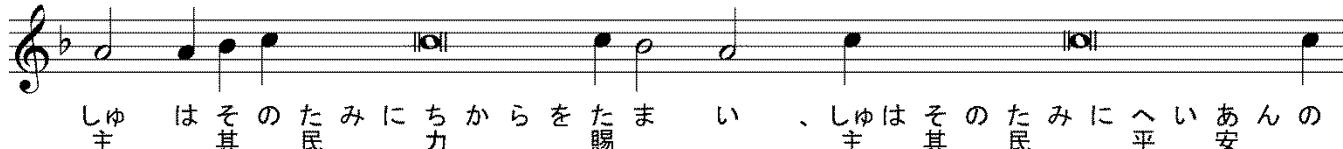
司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

しゅはそのたみにちからをたまい、しゅはそのたみにへいあんの
 主民力からをたまい、主民へいあんの



誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、



誦經) 諸聖人は光榮に在りて祝い、其榻に在りて歡ぶべし。



【 使徒經（アポストロス）314 端 エウレイ書6章13節～20節 】

司祭) えい いち 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、神はアブラアムに許約を賜う時、己より大なる者の一も指して誓うべき

なきが故に、己を指して誓いて云えり、我必祝福して爾を祝福し、益して爾

を益さんと。斯くアブラアムは恒忍して、許約せられし所を獲たり。蓋人は己より大

なる者を指して誓ふ、且事を確證する誓は彼等の凡の争論を息む、故に神も許

約を嗣ぐ者に、己の旨の易らざるを更に明に示さんと欲して、別に誓を立てたり、

斯の二の易らざる者に於て神は謊る能わざるが故に、我等斯の二の者を以て確

なる慰を得ん爲なり、蓋我等は趨りて我が前に在る望を執る者なり。此の望は我

らのたましいためかたうごいかりごとかつまくうちいすなわち等の靈の爲に堅くして、動かざる錨の如し、且幔の内に入る、即イイススがメル

はんしたが よよしさいちょうなわれらためぜんくいところ
キセデクの班に循いて、世世の司祭長と爲りて、我等の爲に前驅として入りし所なり。

(比較用 口語訳) 神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言わされた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いつそうはつきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事がらによって、前におかれている望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなつて、はいられたのである。

【 使徒經 (アポストロス) 229 端 エフェス書5章9節～19節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾

らかみ よろこ ところ なに つまびらか み むす くらやみ おこない あづか なか
等神の悦ぶ所の何なるを審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、

むしろこれせ けだしかれら ひそか おこな こと い または べ およ せ こと
甯之を責めよ。蓋彼等が隠に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は

ひかり よ あらわ けだしおよ あらわ こと ひかり ゆえ い い ものお し
光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐める者起きよ、死

ふくかつ なんぢ てら ここ もつ み おこない つつし むち もの ごと
より復活せよ、ハリストス爾を照さん。是を以て視よ、行を慎みて無智の者の如く

すなわちち もの ごと とき おし ひ あ こ ゆえ しりよ もの
せず、乃智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は惡しけらばなり。是の故に思慮なき者

ななか すなわちかみ むね なに さと またさけ よ なか こ よ ほうとう
と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。又酒に酔う勿れ、此れに由りて放蕩あり、

すなわちしん み せいせい かしょう ぞくしん しふ もつ くち とな こころ わ
乃神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、

しゅ さんび
主を讃美せよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい——光はあらゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである——主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。実を結ばないやみのわざに加

わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御靈に満たされて、詩とさんびと靈の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

司祭) なんぢ へいあん
爾 に 平 安 、

誦經) なんぢ しん
爾 の 神 に も、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第7調・克肖者の、第7調 】

司祭) えいち
睿智、



アリルイヤ、アリルイヤ、ア リルイヤ。

誦經) しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな
至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌うは美なる哉、



アリルイヤ、アリルイヤ、ア リルイヤ。

誦經) なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな
爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、



アリルイヤ、アリルイヤ、ア リルイヤ。

誦經) かれら しゅ みや う わ かみ にわ さか
彼等は主の宮に植えられて、我が神の庭に榮ゆ、



アリルイヤ、アリルイヤ、ア リルイヤ。

司祭) (黙誦: ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん
人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしそん
 爾 は我が 靈 と 體 との光 照なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を 施す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【福音經（エヴァンゲリオン）マルコ福音書40端 9章17～31節】

司祭）えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
 睿智、肅 みて立て聖福音經を聽くべし、衆 人に平安、



司祭）でん せいふくいんけい よみ
 マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭）つつし き
 謹 みて聽くべし、

司祭）か ときあるひと つ ふくはい い し われおし き よ わ こ なんぢ
 彼の時 或 人イイススに就きて、伏 拜して曰えり、師よ、我 痘の鬼に憑られたる我が子を 爾

たづさ きた き いづこ かれ とら な たお かれあわ ふ は か からだか
 に 攝 え來れり。鬼は何處に彼を執うとも、投げ 仆し、彼 泡を噴き、歯を切り、體 枯る、

われなんぢ もんと これ お い こ かれらあた かれ こた
 我 爾 の門徒に之を逐い出ださんことを請いたれども、彼 等能わざりき。イイスス 彼に答え

いわ ああしん よ われいつ なんぢら とも あ いつ なんぢら しの かれ
 て曰く、噫 信なき世や、我 何時までか 爾 等と偕に在らん、何時までか 爾 等を忍ばん、彼

わ もと たづさ きた すなわちかれ たづさ きた かれ み きたちまちかれ ひきつけ
 を我が許に 攝 え來れ。乃 彼を 攝 え來れり、彼イイススを見れば、鬼 忽 彼を拘 繁

かれち たお まろ あわ ふ そのちち と かれ か な いづれ とき
 させ、彼地に仆れ 輾びて沫を噴けり。イイスス 其 父に問えり、彼に斯く爲りしは 何 の時よ

い おさな とき き かれ ほろぼ ため しばしばひ またみづ とう なんぢ
 りか。曰えり、幼 き時よりなり。鬼は彼を 滅 さん爲に、屢 火に又 水に投じたり。爾

も なに よく われら あわれ われら たす これ い なんぢも いくばく
 若し何をか能せば、我等を 懨 みて、我等を助けよ。イイスス 之に謂えり、爾 若し幾 何

しん よく しん もの よく どうじ ちちただち なみだ た よ
 か信することを能せば、信する者には能せざることなし。童子の父 直 に 涙 を垂れて、呼

い しゅ われしん わ ふしん たす たみ は あつま み おき いまし
 びて曰えり、主よ、我 信ず、我が不信を助けよ。イイスス 民の趨せ 集 るを見て、汚鬼を 禁

これ い おし みみしい き われなんぢ めい かれ い ふたたびかれ い
 めて、之に謂えり、瘡にして 蟲 なる鬼よ、我 爾 に命ず、彼より出でて、再 彼に入る

なか き さけ はなはだ かれ ひきつけ い かれ し もの ごと おお
 勿れ。鬼號びて、甚 しく彼を拘 繁させて出でたり、彼は死せし者の若くなりて、多く

ものかれし い いた そのて と かれ おこ かれすなわちた
 の者 彼死せりと云うに至れり。イイスス 其手を執りて、彼を起したれば、彼 卽 立入り。

いえ い とき そのもんとひそか かれ と われら これ お い あた なん
 イイスス家に入りし時、其 門徒 私 に彼に問えり、我等が之を逐い出だす能わざりしは 何

ゆえ かれい きとう ものいみ よ こ たぐい い え かれらかしこ
の故ぞ。彼曰えり、祈禱と 齋 とに由らざれば、此の 類 は出づるを得ざるなり。彼等彼處
い を出でて、ガリレヤを過ぐ、彼は人の之を知らんことを欲せざりき。蓋 其門徒に教えて、
ひと こ ひとびと て わた ひとびとかれ ころ ころ のちかれだいさんじつ ふくかつ い
人の子には人 人の手に付され、人 人 彼を殺し、殺されて後 彼 第三日に復活せんと曰
えり。

(比較用 口語訳) 群衆のひとりが答えた、「先生、おしの靈につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。靈がこのむすこにとりつきますと、どこででも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この靈を追い出してくださるように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。靈がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。靈はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうしました。しかしこれで、わたしはあなたがたをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信する者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた靈をしかつて言われた、「おしとつんばの靈よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいって来るな」。すると靈は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人は、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして靈を追い出せなかつたのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈によらなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをとおって行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかつた。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

【福音經（エヴァンゲリオン）マトフェイ福音書10端 4章25～5章12節】

司祭) 睿智、イオアン傳の聖福音經の讀、謹みて聽くべし、

司祭) 彼の時、ガリレヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より衆くの民 彼に従
えり。イイスス群衆を見て、山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。彼口を啓きて、
これおしいしんまづものさいわい てんごくかれらもの なもの
て、之を教へて曰えり、神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。泣く者は
さいわい 福なり、彼等慰を得んとすればなり。温柔なる者は福なり、彼等地を嗣がんとすれば
なり。義に飢え渴く者は福なり、彼等飽くを得んとすればなり。矜恤ある者は福なり、

かれらあわれみえ
 彼等矜恤を得んとすればなり。心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。和平を
 わへい
 おこなものさいわい
 行う者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。義の爲に窘逐せらるる者は
 もの
 さいわい
 てんこくかれらもの
 福なり、天國は彼等の有なればなり。人我の爲に爾等を詣り、窘逐し、爾等の事
 ぎため
 きんちく
 なんぢらこと
 を謫りて諸の惡しき言を言わん時は、爾等福なり、喜び樂めよ、天には爾等
 てんなんぢら
 むくいおお
 の賞多ければなり。

(比較用 口語訳)

こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびただしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれるとき、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「これらの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔軟な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。



しゅよ、こうえいはなんぢにき歸し、こうえいはなんぢにき歸す。

※聖體礼儀③ ～